

## 再建主義ウォッチング掲示板 過去ログ

2004年4月15日(No.128)～5月25日 (No.205)

米国のキリスト教新右翼思想である「キリスト教再建主義」(Reconstructionism, Dominion Theology, Kingdom Now Theory, Theonomy) に対して、真剣な憂慮を表明する立場に立つ人たちのための、情報交換・意見交換・問題提起のための掲示板です。なお、この掲示板の趣旨と関係がないと管理者が判断した書き込みについては、書き込んだ方への事前の承諾を求めずに、一方的かつ独断的に削除することがありますので、ご了承ください。

### [再建主義ウォッチング掲示板 現行ログ](#)

#### ■205 フルプレテリズム反駁

[山谷](#) - 2004/05/26 11:43 -

フルプレテリズム陣営が提出した自説の根拠となる101の引照聖句を、四つの引照聖句（使徒、ローマ、テサロニケ、ペトロ）で反駁する、下記の文書を提出しました。

#### [フルプレテリズム101を反駁する](#)

#### ■203 聖書的聖書解釈法

[山谷](#) - 2004/05/25 14:54 -

これまでの議論を通して、＜国家は中間時の中間領域を占める天使的勢力と一体である＞ことを明らかにして来ました。これにより、「ヒューマニズムが占める真空の中間領域」は存在しないことになり、再建主義の政治的アジェンダは、新約聖書神学的根拠を持ち得ないことが明らかになりました。

次の議論として、＜神御自身でなくして、天使たちが律法を授与した。それゆえ、律法は神から直接的に由来するものではなく、神はおよそ律法を与えたまわなかった＞(H.W.バイヤー、P.アルトハウス、NTD新約聖書註解) という点を、ガラテヤ3:19、ヘブライ2:2、使徒7:38、7:53の釈義を通して、明らかにして行きたいと思います。

手がかりとなる聖句は、次の通りです。

#### ガラテヤ3:19

律法は、約束を与えられたあの子孫（イエス）が来られるときまで、違反を明らかにするために付け加えられたものであって、天使たちを通し、仲介者の手を経て制定されたものです。

#### ヘブライ2:2

もし、天使たちを通して語られた言葉（律法）が効力を発し、すべての違反や不従順が当然な罰を受けたとするならば・・・

#### 使徒7：38

この人（モーセ）が、荒れ野の集会において、シナイ山で彼に語りかけた天使とわたしたちの先祖との間に立って、命の言葉を受け、わたしたちに伝えてくれたのです。

## 使徒7:53

天使たちを通して律法を受けた者なのに、それを守りませんでした。

上記の聖句は、いずれも、＜天使たちを仲介者として律法が制定された＞とする後期ユダヤ教の概念を援用しつつ、＜キリスト集中論的な光に照らして律法を批判的に検討する＞という新約聖書中の解釈学的方法を提示しています。

これが、決疑論的に考えた場合の「聖書的聖書解釈法」であるとするならば、再建主義の根拠は崩壊することになります。

ただ単純に神の言葉である律法を批判するならば、それは、旧約の神を悪鬼とするマルキオンの異端の誤りに通じるわけですが、＜中間領域としての天使的勢力＞を仲介者として設定することによって、＜神を批判することなしに律法を批判することを可能にする聖書解釈法＞が、新約聖書においては、成り立っているのです。

新約聖書が＜このような聖書解釈法＞を採用していることは明白であり、ガラテヤ、ヘブライ、使徒言行録の該当箇所は、その証拠でありましょう。

■202 聖書が前提ではなく怒りや憎しみが前提 内なる人 - 2004/05/23 00:53 -

私が再建主義の主張を読んでしばしば思うのは社会の荒廃は共産主義や前千年王国論を信じるクリスチャンのせいだと見なし、その反発からつまり純粋に聖書を前提にする前にそのような憎しみや怒りが主張の動機になっているのではないかという点です。

だから山谷先生が書かれたように自分たちの主張に適さない聖書の箇所は無視するのでしょうか。

■201 世界問題 [山谷](#) - 2004/05/22 15:07 -

フルプレテリズム再建主義者は、ルカ福音書第2章の「全世界の住民を人口登録せよ」という皇帝の命令から、＜初代教会では、世界とは全地球のことではなくて、ローマ帝国の領土を意味していたに過ぎない＞と解釈し、それゆえ、紀元70年の聖都崩壊の時点においては、「すでに全世界に福音は宣べ伝えられていた。なぜなら、ローマ帝国の領土全域に、その時点で伝道が及んでいたから」と主張するのです。

しかし、皇帝の命令に使用されている「全世界」という言葉は、原語ではオイクメネーであり、新共同訳ではこれを「領土」と訳しています。

これに対して、マルコによる福音書末尾の大宣教命令では、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」と言われており、ここでの「世界」の原語は、コスモスが用いられています。また第二ペテロ書2章5節の、ノアの洪水に言及している箇所では、やはり「世界」の原語は、コスモスが用いられています。

そこで、『キッテル新約聖書神学事典』を参照してみると、次のように言われています。

オイクメネー：

人間の住む世界。ローマ帝国。政治的領域としての世界。

コスモス：

宇宙。天と地。被造世界。創造に始まり終末で終わる世界。  
世界システム。人間生活の舞台。人間が住む世界。  
天使的諸力が支配する領域としての世界。  
神の救済の行為の対象としての世界。

以上を見るならば、「全世界の人口調査だから、世界とはローマ帝国の領土を指すのだ。それゆえ、紀元70年の聖都壊滅で艱難預言は成就したのだ」とするフルプレテリズム再建主義の主張は、あまりに粗雑な聖書解釈であると言わざるをえません。

## ■200 宗教右派・再建主義の問題点

[山谷](#) - 2004/05/22 14:13 -

原理主義的再建主義の政治的アジェンダを勘案して、実現可能な政治的アジェンダを作成し、ロビー活動や大統領選挙を通して「実現化」を目指している米国キリスト教新右翼ですが、＜前提主義に徹して考えてみる＞ならば、矛盾が見えてくるようです。

たとえば、＜もしわたしが再建主義者であるなら＞、次のような政治的アジェンダを提案するはずであろうと思います。

- ◆銃規制
- ◆軍備撤廃と国の交戦権の放棄
- ◆利子付債務の禁止
- ◆七年毎の自動的債務帳消
- ◆七年毎の全農業生産物の無償配給
- ◆五十年毎の土地の原住民への返還

なぜなら聖書に＜殺してはならない＞＜剣を取る者は、剣によって滅びる＞＜右の頬を打たれたら、左の頬を差し出さなさい＞＜敵を赦し、迫害する者のために祈りなさい＞＜剣を打ち変えて、鋤とする＞＜復讐してはならない＞＜利子を取って貸してはならない＞＜安息年の収穫物は奴隷・被雇用者・困窮者のものとなる＞＜安息年に債務を帳消しにせよ＞＜ヨベルの年に土地を元の持ち主に返還せよ＞と、言われているから。

これらは、旧約律法で命じられていることであり、また、主イエスはそれらを敷衍強化された（と再建主義者は主張する）のですから、その命令を決疑論的に検討するなら、当然上記のような政治的アジェンダが提出されて来るはずです。

しかし、どういうわけだか、原理主義的再建主義者も現実的再建主義者も、中絶禁止・同性婚禁止・死刑強化・大幅減税・経済自由化だけしか言わない。

なぜなのでしょう？

考えてみると、弱い立場の人で、かつ、自分たち再建主義者とは直接関係のない人たちを追い詰める政策だけに関心があるように見えます。あるいはまた、＜税金を取られたくない＞＜経済活動への法的諸規制を撤廃して、完全な自由競争を促進し、もっとお金儲けをしたい＞という、お金に関する政策だけに関心があるように見えます。

そう考えるなら、＜利子付債務の禁止＞＜七年毎の自動的債務帳消＞＜七年毎の全農業生産物

の無償配給><五十年毎の土地の原住民への返還>といった政治的アジェンダを、どうして出して来ないのかがわかります。

理由は、自分たちへの直接的な損害になるからです。

このように見ると、前提主義という看板を掲げていながら、ほとんど、あるいは、まったく前提主義に立っていないことがわかります。

■198 中立か、中性か、中間か

山谷 - 2004/05/21 10:05 -

>簡単にいえばこの世には神様の支配もサタンの支配もおよばない中立の領域があるということでしょうか？

この問いについては、ドイツの改革派の神学者で、カルヴァン研究家のヴィルヘルム・ニーゼルの論述が、参考になると思われます。以下は、ニーゼル著『カルヴァンの神学』第15章からの引用ですが、括弧内の文はカルヴァン著作集から引かれて、カルヴァン自身の言葉となっています。

—以下引用—

「この世の政治は、神の摂理と、聖なる指定に基づく」  
「この世の主権者たちは、この世を正当に正しく支配するべく、神ご自身が、彼らを制定したもうた」  
上官たちは「神からの委託を持ち、神的な全権を付与せられる。確かに彼らは神の代理をなし、ある程度まで神の事柄を遂行する」  
彼らは、神と人間との間に場所を占める。  
カルヴァンは、彼らがさらに、「彼らの人格に関してではなく、彼らが所有しているところの職権に関して」神と呼ばれていること（詩編82:6）を参照するよう、力強く命じている。  
しかしながら、彼らは神の代表者として、いかなる自立性をも所有しない。彼らはただ全く神の奉仕者であり、神の使用人である。  
神の世界統治のこの様式は、神が一般にただ間接的に神の支配を実現したもうことに基礎付けられている。

—引用終わり—

上記文章中の「この世の主権者たち」は、ギリシャ語では<エクスーシアイ>であり、これが、新約聖書においては<中間時の中間領域を占める天使的勢力>であることを解明したのが、ハインリッヒ・シュリーア、ギュンター・デーン、カール・バルト、オスカー・クルマン、ヘンドリクス・ベルコフといった神学者たちでした。その中には、改革派の神学者が何人かいますが、これは、<エクスーシアイは天使的勢力を意味する>と考えた場合でも、カルヴァンの政治神学が有効かつ整合的に機能することを意味しています。

■197 なるほど

内なる人 - 2004/05/21 02:17 -

素早い回答ありがとうございます。

自然法をサタンから生まれたものとするか、神様がキリスト者、非キリスト者を問わず全ての人間に与えられた一般恩恵とするかで分かれる気がします。



前者が再建主義者的な考え、後者が他の大部分のキリスト者的な考えとなるかなと。

□196 中立の領域はない

ただのおじさん - 2004/05/21 01:53 -

>神と人の間の仲介者としての天使的勢力

というのは中立的な領域を指すものではないでしょう。神の領域の支配を助ける役割じゃないでしょうか。

さらに自然法は恩恵なのですから、それに準じたものでしょう。

□195 天使的勢力とは

内なる人 - 2004/05/21 00:38 -

簡単にいえばこの世には神様の支配もサタンの支配もおよばない中立の領域があるということでしょうか？

そして自然法とはキリスト者であっても非キリスト者であっても人間なら従わざる得ない逆らうことのできない普遍的な法則でしょうか？

□194 宗教右派は悪魔的ヒューマニストではないのか？！

ただのおじさん - 2004/05/20 23:06 -

>中絶と同性結婚の法律及び合衆国憲法による禁止

これ真面目に中絶や同性婚を反対している共和党支持のクリスチャンたちはどう思っているのですか？

彼らはこのことを知っているのですか？

私の知っている宣教師はほとんどがアメリカ人であり、私の教会ももとは米国の宣教団体から派遣された宣教師によって設立され、何人ものアメリカ人の宣教師が私の教会に属しました。彼らはみな中絶や同性婚反対であり、共和党支持です。母体の米国の宣教団体には、中絶や同性婚に対して真面目に反対運動をしている人たちもいます。彼らもまた共和党支持者です。その様な母体を持っている教会に属する私自身、中絶にも同性婚にも大反対であり、特に日本の中絶の状況には真剣に憂慮しており、プロライフ（クリスチャンを中心とする中絶反対派）の運動にさえ参加を真剣に考えている人間です。その様な人間にとって、この様な政治的結託は、再建主義者が忌み嫌う悪魔的ヒューマニズムそのものです。彼らは自分たちの行動が悪魔的ヒューマニズムであることに気が付いているのでしょうか？

これがキリスト教徒の政治への関与の仕方だとしたら、神様を冒涇しているんじゃないやしません？

このことが公になった以上、このことへの悔い改めがない限り半永久的に、宗教右派を利用してきた共和党は選挙で負け続けるべきです。この様な政治的結託によってまで、中絶や同性婚を禁止などして欲しくありません。私自身、根本主義＝宗教右派の仲間、と見なされたことが何度もあります。宗教右派は悪魔的ヒューマニストに過ぎない、とさえ思えます。少なくとも彼らはファンダメンタリストではありませんね。アメリカ人なら抗議をするのに。

□193 『聖書律法綱要』対抗論

[山谷](#) - 2004/05/20 21:44 -

再建主義の創始者ラッシュドゥーニーの『聖書律法綱要』「第二戒・法の座」論に対して、終末論的ウェスレアン・アルミニウス主義の立場から、対抗論を提出しました。

# 『聖書律法綱要』 「第二戒・法の座」論への終末論的ウェスレアン・アルミニアンによる対抗論

## 192 宗教右翼と再建主義

山谷 - 2004/05/20 10:01 -

再建主義者、曰く：

>宗教右派やファンダメンタリズムは、ディスペンセーションナリズムを捨てない限り、我々とは同一ではない。彼らの「統治主義」とは我々のそれとはまったく異なる。

先月頃より日本の各種メディアで、米国のキリスト教新右翼に対する注目度が急速に高まっています。これに対して、再建主義者は、「宗教右翼と再建主義を同一視されるのは、迷惑である」と抗議しています。

しかし、再建主義創始者ラッシュドゥーニーの女婿であり、再建主義最大の論客であるゲイリー・ノース自身が、宗教右翼と再建主義が一体であると述べているのです。一体であるところではありません。「再建主義が宗教右翼を生んだ」とまで言っているのです。

以下の文章は、ラッシュドゥーニー逝去に際してゲイリー・ノースが発表した追悼文です。

—以下引用—

ラッシュドゥーニーの著作は、新キリスト教右翼の思想的中核の源泉である。  
新キリスト教右翼は、1980年に突然現れた投票者層として、米メディアの注目を浴びた。この投票者層は、ロナルド・レーガンの圧倒的支持層であった。  
レーガンの大統領就任の二週間後に出た『ニューズウィーク誌』1981年2月2日号に、この宗教的右翼のシンクタンクが、ラッシュドゥーニーのカルケドン・ファウンデーションであるとする短い記事が掲載された。  
しかし、米メディアの主流は、まったく関心を払わなかった。宗教右翼の思想的源泉が、いったいどこにあるのかを、米メディアは解明しようとしなかった。テレビ伝道者のジェリー・ファルウェルやパット・ロバートソンを目にしたメディアの知識人は、テレビこそが世界的変革の源泉であろうと考えた。  
1981年当時、ラッシュドゥーニーは新右翼や新キリスト教右翼の指導者を別にすれば、だれにも知られていなかった。そうして（2001年2月8日の）死に至るまで、知られないままであった。

—引用終わり—

つまり、再建主義こそが宗教右翼の母体だということを、再建主義の中心人物ゲイリー・ノース自身が言明しているのです。

米メディアが宗教右翼の源泉と誤認したジェリー・ファルウェルやパット・ロバートソンといったテレヴァンジェリストは、再建主義を勘案して、より現実的アジェンダを提示したに過ぎないのです。つまり、「堕胎者や同性愛者の公開処刑」という原理主義的再建主義のアジェンダを、「中絶と同性結婚の法律及び合衆国憲法による禁止」という現実的再建主義のアジェンダに書き換えたのが、テレヴァンジェリストなのです。

原理主義的再建主義はイラク戦争に反対だから、イラク戦争賛成の宗教右翼は、再建主義と別物である、と言うのは、おかしいと思われます。

なぜなら、現実的再建主義者と原理主義的再建主義者は、15の法領域（あるいは文化の17の領域）をキリスト者が征服するという基本路線において、すでに合意を形成しているからです。

## □190 聖書と決疑論

[山谷](#) - 2004/05/19 15:55 -

再建主義者は、＜人間の文化の全領域を聖書に拠って決疑論的に構成しなければならない＞と主張します。

そうして、その最大目標が、旧約律法を国家の統治システム（司法・立法・行政）に厳格に適用するという、再建主義の政治的アジェンダです。

ところで、「政治」は、人間の文化の全領域の中でワン・オブ・ゼムに過ぎません。人間の文化には、政治と同様に重要なものとして、「医学」がありますし、「土木」があります。

そうして、「政治」を聖書に拠って決疑論的に構成しなければならないのなら、「医学」や「土木」についても、聖書に拠って決疑論的に構成しなければならないはずなのです。そうでないと、「悪魔的ヒューマニズム」となってしまうからです。

しかし、実際のところ、聖書に拠って癌患者への治療方法を構成することは難しいでしょう。また、聖書に拠って橋梁工事の力学的計算や工法を構成することは難しいでしょう。

ことはなにも、「医学」や「土木」だけではありません。「野球」のルールを聖書に拠って決疑論的に構成することが出来るのでしょうか？ 「コンピューター」の構造を聖書に拠って決疑論的に構成することが出来るのでしょうか？

非常に難しいと思われます。

では、聖書に拠って決疑論的に構成しようと努力しなければ、わたしたちは、「医学」も「土木」も「野球」も「コンピューター」も、手にすることが出来ないし、使うことも出来ないのでしょうか？

そんなことはないのです。

なぜなら、神は一般恩恵という「聖霊の照明」によって、人間に理性能力と創造的能力を授けておられて、人間は聖書のページを参照しなくても、「医学」と「土木」と「野球」と「コンピューター」を構築し、利用し、改良することが出来るからです。このことは、カルヴァンも『キリスト教綱要』で認めている通りです。

しかし、聖書のページを参照しなくても、神から与えられた一般恩恵を用いて「医学」と「土木」と「野球」と「コンピューター」を構成できるのであれば、「政治」についても、同じことが出来るのではないだろうか？

そうして、＜そのようなことを可能にする一般恩恵が確かに存在すると聖書が証言している＞のであれば、そのことをもって、前提主義として十分、筋が通ることになるのではないか？

しかし、再建主義者は「一般恩恵は存在しない」と主張します。

その再建主義者は、人間の文化の全領域を聖書に拠って決疑論的に構成すると主張しながらも、提出するのは「政治的アジェンダ」だけです。

そうして、本来ならば、同じようにして提出しなければならないはずの、「再建主義的医学」

「再建主義的土木」「再建主義的野球」「再建主義的コンピューター」については、何一つ提案できないのです。

これは、結局のところ、再建主義者がく政治にしか興味を持っていない>ということを意味しています。

再建主義者は、「一般恩恵は存在しない」と主張するのであれば、政治的アジェンダだけではなく、他の一切のものについても代案を提出しなければ、前提主義としての筋が通らないのではないだろうか？

しかし、百歩譲って、「再建主義者はようやくまだ仕事の端緒についたばかりであり、やがて再建主義的医学・再建主義的土木・再建主義的野球・再建主義的コンピューターについても有効な提案を行うはずであろうから、忍耐深く待つことにしよう」

だが、果たして、人間の文化の全領域を、聖書に拠って決疑論的に考え始めて、簡単に答えが提出できるものなのだろうか？

ファリサイ派の律法学者は、ユダヤ人の文化の全領域を聖書に拠って決疑論的に構成しようと努力した結果、無数に対立する諸見解・諸解釈・諸弁証・諸論理が繚乱する『タルムード』という、エンドレスの議論へ入り込んで行ったのではなかったか？ そうして、<議論が対立すればするほど、見解が分かれば分かれるほど、意見が異なれば異なるほど、真のタルムードの教師であるメシアが再臨されたときの栄光は、大きくなる>と諦観するに至り、半ば匙を投げたのではなかったか？

## □186 ゲネア問題再び

[山谷](#) - 2004/05/19 14:30 -

フルプレテリズム再建主義者、曰く：

>ゲネアの訳は「時代」です。セイアーはマタイ24：34とマルコ13：30を引き合いに出して、「同じ時代に生きる全群衆であり・・・ある、また同じ時代に生きるユダヤ人として特に使用されています。」と説明しています。(Joseph Henry Thayer, A Greek-English Lexicon of the New Testament, Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1979, p. 112).

>G・アボット・スミスはギリシャ語のゲネアは「民族、群れ、家族」を意味するが、新約聖書ではいつも「時代」を意味すると書いています。(G. Abbott-Smith, Manual Greek Lexicon of the New Testament, 2nd ed., Edinburgh: T.&T. Clarke, 1923, p. 89).

>Arndt と Gingrich はそのことばの意味は「『文字通りには、共通の先祖を持つ子孫たち』ですが、『基本的には同じ時代に生まれた人々であり、ある時期に生きるすべての人々、ある時代、同時代人という意味にまで広がります。』」と記しています。(W.F. Arndt and F.W. Gingrich, A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature, Chicago: University of Chicago Press, 1957, p. 153).

これに対しては、「リデル・スコット、ゲゼニウス、キッテル、ディートリッシュ、シュヴァイツァー」によって、すでに有効な反論を過去に試みしたので、決着済みだと思っていました。

しかし、さらにまた、このように反論したいと思います。

1. もし「ゲネア」が、期間33年の時代を意味するのであれば、主イエスが予告した大災忌は、紀元70年に起きたユダヤ戦争による聖都壊滅を指していることになります。すると、マタ



イ24:29の「その苦難の日々」という言葉は、エルサレム陥落を意味します。

2. ところで、マタイ24:29は続けて、「その苦難の日々の後、たちまち、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。そのとき、人の子の徴が天に現われる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る」と言っています。

3. つまり、紀元70年の聖都壊滅の後、「ただちに」すなわち「直後に」、主イエスの再臨が起こり、地上のすべての民族はそれを目撃する、ということになります。

4. ところが、実際には、紀元70年の聖都壊滅直後に主の再臨を目撃した個人・集団・民族は、ひとつも存在しません。それを証言する伝聞や記録も残っていません。

5. そこで、フルプレテリズム再建主義者は、「イエスは、だれにも気付かれずに、ひっそりと再臨したのだ」と主張します。すなわち「匿名の再臨」です。

6. しかし、マタイ24:30は、「**地上のすべての民族は・・・見る**」と言っています。つまり、「匿名の再臨」はありえず、再臨が起こるとしたら、それは、「公然の再臨」であるはずなのです。

7. これにより、ゲネアを期間33年と解釈すべきではない、ということになります。そこで、ゲネアに相当するアラム語「ドール」を申命記の「モーセの歌」に関連して釈義するなら、時代・世代という意味しか持たない「ドール」が、＜第一神殿及び第二神殿崩壊の原因を作り、また、崩壊に直面した時代・世代＞という意味で用いられていることが明らかになります。これを受けて、＜ゲネアは、期間33年ではなく、むしろ、より広範な期間を見渡す「メシアを拒絶したユダヤの民の全体」という包括的意味に解釈するのが妥当だ＞ということになります。

8. 以上を反証するためには、フルプレテリズム再建主義者は、（1）再臨が「匿名の再臨」であることを聖書によって論証し、かつ、（2）申命記のモーセ著作性を否定して、エズラの時代まで成立年代を引き上げなければなりません。

9. しかし、実際には、「匿名の再臨」を支持する聖句は見当たらず、また、ファンダメンタリストであるならば当然、申命記のモーセ著作性を採用するわけですから、フルプレテリズム再建主義者が「聖書主義とファンダメンタリズムを放棄するのでない限り、ゲネア期間33年説は立たない」ということになります。

## ☐ 184 聖書・前提主義・解釈方法

[山谷](#) - 2004/05/18 11:16 -

聖書を読むときに、福音と律法、予定と自由、恩恵と自然、というような「二項図式」に着目して読み、しかもそこに一元的解決を求めようとするならば、その解釈は「右に寄る」か「左に寄る」か、どちらか選ばざるを得なくなってしまう。

こうして、右か左かをめぐって、神学論争が発生することになります。

しかし、どちらにも寄らない道を選ぶならば、それは、カルヴァンのような「アーチ構造の神学」を採るか、「弁証法的構造の神学」（契約神学）を採るか、「漸進的啓示の神学」（ディスペンセーションナリズム）を採るか、ということになるでしょう。これらは、聖書上の矛盾を、矛盾しているままに保持して、静的に均衡させるか、動的に展開させるか、という選択になります。

しかし、「二項図式」にあてはめることを最初から回避して、「三項図式」で読もうとする方法もあります。

これが、「恩恵」と「自然」の間に「中間領域の天使的勢力」を置く読み方です。この場合、新約聖書も旧約聖書も、神と人の間の仲介者としての天使的勢力について述べているのですから、聖書神学的に可能な読み方である、ということになります。中間時の中間領域における天使的勢力と中間倫理という「時制」に着目した読み方を「救済史的・終末論的神学」と呼んでもよいでしょう。

さらにまた、「恩恵」と「自然」の完全な調和としての「受肉者キリスト」において二項図式を超克する、という道があります。この場合は、「キリスト集中論的な聖書解釈」を採ることになります。マルチン・ルターがそうであり、また、最近ではカトリックの現代神学者カール・ラーナーがそうです。

聖書を前提として出発する「前提主義」には、異論はないとしても、では、その聖書をどう解釈するか、ということに関しては、上に述べたように「二項図式の解釈方法」か「弁証法的解釈方法」か「救済史的・終末論的解釈方法」か「キリスト集中論的解釈方法」かで、立場が分かれるわけです。

つまり、聖書を前提として出発したとしても、解釈方法が異なれば、そこから導き出される結論が、違って来てしまうのです。

本当の前提主義になるためには、解釈方法についてもまた、聖書から決疑論的に導き出さなければならない、ということになるでしょう。

■182 信条や神学は絶対ではない

内なる人 - 2004/05/17 23:37 -

聖書は真理であるけども聖書から導きだされた神学および信条は間違いとは思いませんが完全ではないと思います。

再建主義の人達は聖書を前提といいつつも一方でしばしば自己の神学および信条を前提に議論をし、聖書を解釈しているかなと思います。

■181 二重予定と後千年王国論を信じることは矛盾しているかも

内なる人 - 2004/05/17 23:18 -

滅びに予定されている人がいると主張しつつ、時が経つにつれ全ての人が救われると主張するのは矛盾してる気がします。

時代が経つにつれ主は滅びに予定している人を減らしていくと考えるのなら矛盾はしないかもしれませんが。

無千年王国論を改革派系の教会が採用しているのも二重予定に一番マッチするからかなと考えてます。

■180 国法・公法・自然法・律法

[山谷](#) - 2004/05/17 10:44 -

ドイツの改革派の神学者ヴィルヘルム・ニーゼルは、著書『カルヴァンの神学』において、政

府・公法・自然法・律法の関係を、カルヴァンの著作集に典拠させつつ、次のように述べています。

—以下引用—

カルヴァンの認識によれば、神の律法の二つの版板によって、「神への愛」と「隣人への愛」の二重の義務が、政府に課せられている。

これは、政府が国民の生活を、聖書の律法的規則に従って規定すべきであるといったような事を意味しない。モーセの儀式的律法や裁判上の律法は、イスラエルの民においてその特殊な任務を終えた。そして今、イエス・キリストの出現後それは取り去られ、他国民の生活の秩序としては、問題にならない。

統治者たちは、「神への愛」と「隣人への愛」の二重の戒めに束縛されることにおいて、むしろ、彼らに必要かつ有用であると思われる諸法律を發布する自由を持つのである。彼らは神から受けた職権により、その全権を与えられている。したがって、ある国に行われる公民的諸法律は、全く人造物である。それらは厳密な意味で公民的法律である。しかしそれらは、神の律法が規定している「愛の永続的規定」によって、整備されねばならない。

—引用終わり—

上記をみると、改革派の「市民的善行を可能にする一般恩恵」とは、自然法である国法・公法を遵守させる恩恵である、ということがわかります。

ヴィルヘルム・ニーゼル略歴

ドイツの改革派神学者。『カルヴァン選集』編纂に従事。1930年にエルバフェルト改革派神学校教授。告白教会の指導者として、逮捕8回に及ぶ。1935年にベルリン神学大学講師。1940年にナチスにより説教を禁止され、ベルリンより放逐される。1946年から68年まで、ヴッパルター神学大学教授。1948年に世界教会協議会（WCC）中央委員。1964年より70年まで、世界改革派教会連盟議長を務める。

## 179 改革派の一般恩恵論とアミレニアリズム

[山谷](#) - 2004/05/16 23:06 -

ゲイリー・ノースの「呪いとしての一般恩恵」という見方は、どう考えてもウェストミンスター信仰告白や大陸系諸信仰告白に示された「市民的善行を可能にする一般恩恵」という概念と合わない気がします。あまりにその発想が、グロテスクだからです。

どうして再建主義は、そのような発想をせざるを得ないのでしょうか？

おそらく、ポストミレニアリズム（後千年期王国）を唱える再建主義は、「国民全員がキリスト者となり、国民の総意に基づく国民契約によって、律法を国家の統治システムに適用する」という政治的アジェンダを掲げていることが、最大要因でありましょう。

まず、国民全員がキリスト者になるためには、非選民も、形式的な信仰告白をして洗礼を受け、名目上のキリスト者とならなければなりません。そうでないと、国民総意に基づく国民契約を締結するという再建主義社会の大前提が、実現出来ないからです。

これには、一般召命の概念と、割礼に取って代った洗礼、という概念を使えば、うまく説明することが出来るでしょう。

つまり、本当は回心しておらず、実際には救われていないのだけれども、説教者が福音を信じるようにという招きをした（一般召命）ので、本心からではなく、うわべだけ素直に応答し、自分でも半ば信じているつもりになり、洗礼を受けて、キリスト者になる、という可能性です。

これにより、実際は非選民であるにもかかわらず、名目上は洗礼を受けたキリスト者である、という立場が実現可能になります。

次に、そのような名目上のキリスト者である非選民は、一般恩恵を受けて「市民的善行」を行うことが可能なのですから、後千年期王国における、律法が適用された公法をすべて忠実に遵守して、秩序ある、安寧な、善良な市民としての生活を送ることが可能になるのです。

この場合、神の意志が十全に現されているところの律法が、国家の公法とそのままイコールになっているのですから、「一般恩恵を受けた非選民は、その一般恩恵に支えられて、律法を遵守することが出来る」ことになります。なぜなら、一般恩恵は、市民的善行を可能にするために「のみ」与えられているものだからです。

普通の改革派神学の場合は、国家の公法は律法ではなく自然法なのですから、市民的善行を可能にする一般恩恵は、ただ単に、自然法の遵守を可能にするものであるに過ぎません。

ところが、後千年期王国を提唱する再建主義は、まさにその後千年期王国という政治的アジェンダのゆえに、「市民的善行を可能にする一般恩恵は、律法の遵守を可能にするもの」ということになってしまうのです。

すると、結論として、非選民は、律法をきちんと守っているのに、救われない、ということになってしまいます。なぜなら、「市民的善行を可能にする一般恩恵は、救いにまで至らせることはない」と定義されているからです。

「律法を守っているのに、救われない」　なぜ、このような奇妙な事態になってしまうのでしょうか。

もちろん、ポストミレニアリズムを採用しないで、アミレニアリズムを採用するならば、このような奇妙な事態にはならないのです。

改革派神学が伝統的にアミレニアリズムを採用し、ポストミレニアリズムを退けてきたことには、きちんとしたわけがあった、ということになるでしょう。

もし、一般恩恵と呼ばれるものが、「神の意志の十全な現われである律法を遵守させておいて、その上で、地獄に落とす」ようなものであるなら、まさに「呪いとしての一般恩恵」と呼ぶほかは、ないでしょう。

そうして、プレミレニアリズムでも、アミレニアリズムでもなく、ただ、ポストミレニアリズムを選択した場合にのみ、一般恩恵は、「呪いとしての一般恩恵」と化してしまうのです。

#### □ 176 ゲイリー・ノースの一般恩恵論

[山谷](#) - 2004/05/16 00:00 -

ヴァンティルばかりか、再建主義の論客ゲイリー・ノースまでもが、一般恩恵を部分的に肯定していることがわかってきました。



こうなりますと、再建主義が「一般恩恵は存在しない」という看板を掲げているのは、再建主義内部におけるある種の誤解、ということになるのかもしれませんが。

しかし、ゲイリー・ノースの一般恩恵論は、通常の神学が言う一般恩恵とはかなり異なっており、言わば「呪いとしての一般恩恵」とでも言うべき体裁になっています。その問題性を、ミシガン州グランドラピッツのプロテスタント改革派神学校教授デヴィッド・エンゲルズマ博士が、神学雑誌『コントラ・ムンドウム』1992年冬季号で指摘しています。それは、次のようなことです。

1. 再建主義は国民の総意に基づく国民契約により、旧約の司法律法を統治システム（司法・立法・行政）に適用し、また、経済システム（民法・商法）や保障システム（社会福祉法）にも適用することを目指しています。

2. 上記が実現するためには「国民全員がキリスト者となり、国民契約に同意する」必要があります。これは、講解説教とホームスクーリングによって、実現可能だとされています。

3. しかし、改革派神学は、二重予定説と限定的贖罪を説きます。つまり、キリストの贖罪は選民だけのためのものであり、神意によって選民から漏れ、滅びに定められている人々が存在することになっています。

4. そうすると、「国民全員がキリスト者となり、国民契約に同意する」という事態は、理論的に絶対に実現不可能である、ということになります。

5. そこで、ゲイリー・ノースは、一般恩恵を導入するのです。つまり、滅びに定められた非選民に対して、神は「呪いとしての一般恩恵」を与え、これにより非選民は、うわべだけの名目的なキリスト者となる、というのです。

6. この場合の「名目的なキリスト者」とは、有効召命を受けておらず、一般召命しか受けていないので、救われておらず、滅びる運命にあるが、一般恩恵に支えられているゆえに、再建主義に同意し、旧約の司法律法が適用された司法制度や社会制度に、従順に従い、善良な市民として生活を送る人々です。

7. この、「呪いとしての一般恩恵」を受けた人々は、再建主義が実現した社会において、旧約の律法を遵守して、善良な市民として生活をしていても、内心においては、神よりも自己を上には置いています。キリスト者としての信仰告白や、律法への服従は、それゆえ、本心から出たものとはみなされず、最終的には滅びるのです。

8. つまり、「呪いとしての一般恩恵」とは、滅びに定められた非選民が、再建主義に同意し、律法を忠実に守り、善良な市民として生活することを可能にさせる、神からの恩恵なのです。この場合、非選民は、律法を忠実に守れば守るほど、「神の怒りの炭火」を自分の頭の上に積むことになります。なぜなら、彼らは律法への服従を、本心から行っているわけではないからです。

このようにして、再建主義が実現した世界においては、有効召命を受けた本物のキリスト者は、たとえ罪を犯して律法による裁きを受けたとしても、限定的贖罪の適用を受けて、罪を赦され、永遠の命を得ることが出来ます。

これに対して、一般召命しか受けていない名目上のキリスト者は、たとえ律法を完全に守って、善良な生活を送ったとしても、限定的贖罪の適用から完全に漏れていますので、行為に現われない内面的な罪のゆえに、永遠の滅びに行くことになるのです。

これが、ゲイリー・ノースが説く、神学的に非常に特殊な、「呪いとしての一般恩恵」です。

**■173 北米改革派と一般恩恵（2）**[山谷](#) - 2004/05/13 23:58 -

一般恩恵をめぐる、わずか二年の間に右から左へと急に動いたカラマズー大会の例は、カルヴァンの「アーチ構造」の神学が、微妙なバランス点の上での均衡を失ったとき、いかに激論が展開され、また、正統派の立場すらもが大きく揺れるかという、絵画的事例でありましょう。

カラマズー論争のあった1920年代の終わりには、プリンストン神学校でやはり高等批評をめぐる議論が戦わされ、プリンストンを辞したメイチェンが1929年にウェストミンスター神学校を設立しました。ヴァンティルは、そのメイチェンに誘われて、プリンストンからウェストミンスター神学校に移り、かの「前提主義」を唱えるに至ったわけです。おそらく、1920年代の北米の改革派においては、高等批評という新しい学問手法がひとつのきっかけとなって、一般恩恵論が突然争点に浮上し、それが「アーチ構造」の神学を右に左に揺さぶり動かす結果となったのでありましょう。この動きの中で、オランダのアブラハム・カイパーの一般恩恵論が、肯定的文脈においても、否定的文脈においても、引っ張り出されることになったのです。

ところで、カラマズーの1924年のキリスト改革派教会大会は、「一般恩恵の三要項」について、大略次のことを決議しました。

（1）一般恩恵とは、選民に永遠の生命を与える救いの恩恵とは別に、すべての人間に対して与えられる、神からの恩恵である。

（2）一般恩恵は、未信者に新生をもたらさないが、その個人生活と社会生活において、罪の発現を抑制し、それにより、人間の社会生活を可能にする、聖霊の一般的働きである。

（3）一般恩恵により、未信者は、善良な市民としての善行を行うことが出来るようにされるが、その行いにより救われるわけではない。

そうして、上記「一般恩恵の三要項」は、ウェストミンスター信仰告白や、ドルト信条、ベルギー信条、ユトレヒト信条など、大陸系改革派諸信仰箇条や、伝統的な改革派神学によって支持されている、と言明したのです。

**■172 北米改革派と一般恩恵（1）**[山谷](#) - 2004/05/13 23:57 -

再建主義者の言うところのヴァンティルは、一般恩恵を完全否定している。そうであるのに、ヴァンティル本人の著作では、一般恩恵が肯定されている。すると、いったいどちらが、本物のヴァンティルなのか？ それとも、ヴァンティルが論理的に首尾一貫していないのか？ こういう疑問が当然湧いてきます。

「アーチ構造」を持つカルヴァンの神学は、一方に「恩恵の絶対性」を立て、もう一方に「一般恩恵と自然法」を立てています。両者は矛盾する関係にあるのですが、矛盾が矛盾のまま「神の栄光」というバランス点の上で、均衡を取っているのです。

この「アーチ構造」が、右に揺れたり左に揺れたりするたびに、「一般恩恵と自然法」をめぐる激しい議論と対立が、改革派神学の内部から発生してくるのかもしれませんが。あるいはまた、一個人の思想の中においても、ある時期は右に、ある時期は左に、と揺れるのでしょうか。そう考えるなら、一般恩恵を否定しつつ、一般恩恵を肯定しているかに見える、ヴァンティルの発言も、理解できるような気がします。

北米の改革派では、1920年代に「一般恩恵」をめぐる激しい論戦が展開されました。そもそもの発端は、ミシガン州のカルヴァン神学校教授ラルフ・ジャンセン博士が、旧約学に高等批評を採用したことに始まります。これは、キリスト改革派教会の逐語靈感説に反する学問手法でしたので、神学校内から反対論が噴出し、ジャンセンは1922年のキリスト改革派教会大会決議により、神学校から放逐されてしまいました。このときジャンセンは自説擁護のために、アブラハム・カイパーの一般恩恵論を引き合いに出して論陣を展開したのです。

ジャンセンは、「無媒介の超自然的領域」（恩恵）と「媒介としての自然領域」（自然）を直接対峙させる「二項図式」のパラダイムは、再洗礼派特有の二元論的異端であると主張しました。そうして、「無媒介の超自然的領域」と「一般恩恵」と「媒介としての自然領域」という「三項図式」で見るパラダイムこそが、伝統的な改革派神学であると論じたのです。つまり「恩恵」「一般恩恵」「自然」という三項図式ですね。（ここでのリンク機能である「一般恩恵」を「中間時の中間領域の天使的勢力」に置換すれば、今回の再建主義反対論の中核理論になるわけです）。ジャンセンは、この三項図式を根拠に、旧約学に高等批評を適用することを正当化しようとした。

思うに、神学者であると同時に、人文主義者でもあったカルヴァンもまた、聖書の本文批評も行っていたわけです。本文批評とは、高等批評と下等批評の組み合わせだと考えれば、カルヴァンもまた、高等批評を行っていたのだと言っても、間違いではありません。しかし、神の絶対恩恵を確信して疑わなかったカルヴァンが、なぜ本文批評をも行うことが可能だったのか？ それはおそらく、カルヴァンが、一般恩恵に支えられた理性能力を信じていたからだ、と考えれば、わかるような気がします。実際にまたカルヴァンは『キリスト教綱要』において、人文主義の学問対象であった古代異教徒の著作に、一般恩恵による理性の光を認めていました。ジャンセンはおそらく、その線で論陣を展開し、補強にカイパーの一般恩恵論を使うことで、自分の立場を正当化しようとしたのでしょう。

結局ジャンセンは議論に破れ、カルヴァン神学校から追放されたのですが、そのわずか二年後の1924年にミシガン州カラマズーで開催されたキリスト改革派教会大会は、なんと、大会決議において、一般恩恵を擁護する『一般恩恵に関する三要項』を制定しました（！）これにより、今度は逆に、ジャンセン批判の急先鋒に立っていたヘルマン・ヘクセマ牧師を筆頭とする「一般恩恵否定派」が、断罪されることになったのです。その結果、ヘクセマ牧師らのグループは、キリスト改革派教会を割って出て、プロテスタント改革派教会を設立するに至りました。今日この「一般恩恵否定派」であるプロテスタント改革派教会の中に、再建主義の信奉者が割合多く見られるようです。

## 171 ヴァンティルと一般恩恵

[山谷](#) - 2004/05/13 15:21 -

再建主義が、一般恩恵と自然法を完全否定しているのに対して、再建主義に「前提主義」という土台を与えたコーネリアス・ヴァンティルは、こと一般恩恵に関しては、それほど強く否定しているわけではないようです。

たとえば、ヴァンティルの著作には「ノンクリスチャンの認識能力」について、次のように述べられています。

ヴァンティル『信仰の擁護』1967年刊、101ページ。

ノンクリスチャンは自然的に以下のことを認識することが出来る。すなわち：

1. 自分が神の被造物であること
2. 自分が神に対して道徳的責任を負っていること

3. 自分が神の栄光のために生きなければならないこと
4. 自分が関わりを持つ世界内の事物の一切に、神の所有を示す刻印が記されていること

以上の事柄を、ノンクリスチャンは自然的に認識することが出来るが、その認識は罪によって抑圧されている。（つまり、神について自然的に知った知識に基づいて生きることは、罪による抑圧のゆえに、出来ない）

ノンクリスチャンがこうした「真理」を自然的に認識出来るのは、人間が神のかたちに似せて作られた存在（イマゴ・デイを持つ存在）だからであり、さらに、イマゴ・デイに由来する認識能力の対象となる世界が「神が創造した世界」にほかならないからである、とヴァンティルは考えるようです。

つまり、「世界」も「理性」も、共に同じ神が創造したものであるから、理性による世界認識は「真理」である、ということになります。

しかし、そこに罪が働くゆえに、人間は認識に基づく正しい世界観の構築を行うことが出来ない。

つまり、墮落とは、「認識論的な墮落」ではなく、「正しい世界観の構築の失敗」である、ということになるのでしょうか。

再建主義が、認識論的な問題を飛ばして、いきなり世界観の構築の問題に入っていくように見えるのは、そのへんの影響があるのでしょうか？

#### □ 169 創造について

[山谷](#) - 2004/05/13 12:02 -

おっしゃるとおり、まさに、創造論と進化論の激しい論戦は、「恩恵vs自然」という、二項図式の世界観的枠組みにおける思想的バトルということになるでしょう。

問題は、しかし、世界が「恩恵」と「自然」とに分離したのは、アダムの墮罪以降である、ということです。つまり、墮罪以前の世界は「恩恵と自然の完全調和」であったわけです。

「アダムの墮罪後」と「キリストの再臨」の二点で挟まれた「墮落した世界」においては、恩恵と自然が分離してしまっており、人間の実存様式や認識様式もそれに規定されているわけですから、そのようなわたしたちが「アダムの墮罪前」の世界や、「キリストの再臨後」の世界について考えようとする、と、不可避免的に「恩恵vs自然」の二項図式に物事を引きずりおろして思考することになってしまおうと思われまふ。

そうしますと、現在の創造論と進化論の戦いは、世界創造という「恩恵と自然の完全調和」の出来事を、墮罪以降の人間の認識様式によって、無理やり「恩恵vs自然」の二項図式の中へと引きずりこもうとする行為だと見ることが出来ます。

そうなりますと、結果的には「恩恵の完全制覇」か「自然の完全制覇」か、二者択一になり、自然が恩恵を食い滅ぼしてしまうことになるのでしょうか。

再建主義は、千年王国という「恩恵と自然の完全調和」を、二契約論パーシャルプレテリズム再建主義という「恩恵vs自然」の二項対立の図式に引きずり込むことによって、自然が恩恵を食い滅ぼす結果になってしまっていると思われまふ。そのことが、「墮胎者と同様愛者の公開処刑」や「経済規制の撤廃による富の蓄積」をクリスチャンの信仰上の目標とするような事態を招いているのでしょうか。



このく「恩恵vs自然」の二項図式の終末に対する照射>を、時間軸を逆にして、<「恩恵vs自然」の二項図式の創造に対する照射>にしたものが、創造論と進化論の対立なのではないかと思われます。

過去の神学論争史では、これと似た事例が、キリスト論論争において起きたことがありました。「恩恵と自然の完全調和」である受肉者キリストを、やはり同様にして「恩恵vs自然」の二項図式で分解しようとした結果、「二性論」から「二意論」へと至りましたが、それでも完全な決着はつかず、<キリストのひとつの人格の中で、神としての意志と人間としての意志がどのように調和していたか？>という論点をめぐり、ルター派の「属性の融通説」、カルヴァン派の「エクストラ・カルヴィニスティクム説」、後期ルター派の「ケノーシス・キリスト説」、同じく後期ルター派の「クリュプシス・キリスト説」が、ぶつかり合いました。

上記のいわゆる「ケノーシス・キリスト論争」は、結局のところ決着していないのですが、そもそも「恩恵と自然の完全調和」であるものを、「恩恵vs自然」の二項図式に無理やり引きずりおろして解剖し、腑分けしようとするのですから、決着がつかないのは当然であるように思われます。

このような論争に対して常に超然としているのが東方正教会で、正教会には「恩恵vs自然」という二項図式の思考方法が薄いので、西方教会におけるような、キリスト論、創造論、終末論をめぐる激しい論争が、あまり起きていないように思われます。

論争を整理するには、

1. アダムの墮罪によって、自然と恩恵が分離したことにより、世界はどのように変化したのか？
2. アダムの墮罪によって、自然と恩恵が分離したことにより、人間の認識能力は、どのように変化したのか？
3. 聖霊が与える一般恩恵によって、「墮罪で損なわれた人間の認識能力」は、どこまで回復されるのか？
4. 聖霊が与える特殊恩恵によって、「墮罪で損なわれた人間の認識能力」は、どこまで回復されるのか？
5. 聖霊が与える特殊恩恵と、世界認識の出発点としての「聖書」との組み合わせ（前提主義）によって、「墮罪で損なわれた人間の認識能力」は、完全に回復されるのか？ あるいは、限定的な回復に留まるのか？

5問目の答えが「限定的な回復に留まる」というものであるなら、おそらく、進化論と創造論の論争は、キリストの再臨とわたしたちの栄化が起きるまでは、決着することがないでしょう。

□166 科学（自然）対キリスト教（恩寵）の対立図式 ただのおじさん - 2004/05/13 01:20 -  
>（カルヴァン派の場合は、墮落は起きえないと考えますので、有効召命を受けていなかった、という説明の仕方を探ります）

こういうカルヴァン派の主張を見かけると、カルヴァン派の人には、神から選ばれている人がすべて分かっている上に、聖書の神様の教えも全て理解できているように思えます。そうでないとこの様な主張など成立はしません。

山谷さんの主張自体は特に異議はありません。

閑話休題。私が1クリスチャンのレベルを超えて聖書を学ぼうと思ったのは、進化論とキリスト教（創造論）の関係について考えたのがきっかけでした。これは自ずと科学（自然）対キリスト教（恩寵）の対立図式に持ち込まれ、強制的に二者択一による一方の廃棄を要求されるのです。その様な意見をネット上でさんざん読まされ、さらにクリスチャンたちの中でも、進化論に妥協し、6日間創造説という聖書の重要な教えを否定する人たちが現われたので、どのような解決法があるか考えました。

今から見れば、一般恩恵的な考え（当時は一般恩恵という考え方は意識していなかった）を前提主義に導入して、2つの学問（クリスチャンと非クリスチャンの別々の学問）というカテゴリーの考えを認め、科学対キリスト教の対立図式の解決を図ろうとしたのです。もちろん、クリスチャンの学問は学問的真理に到達しますが、非クリスチャンの学問は部分的な真理にしか到達せず、時に誤ることもあるということになります。

すなわち、クリスチャンが進化論に妥協する考え方をすることは、自然が恩寵を食い滅ぼすことになるということです。

神が進化させたというリベラル派のクリスチャンの支持する有神論的進化論、天地創造の聖書の記述から進化論の主張（科学の主張？）にも適合するように解釈によって6日以上の日数を無理矢理作る自然神学的な漸進創造説、スコフィールド・レファレンス・バイブルの注釈で根本主義者に広がった間隙説、これらはみな6日間創造説に穴の開く聖書解釈です。最近組織神学書の翻訳が出ているエリクソンは翻訳者のサイトで確認し、翻訳文も見てみましたが漸進創造説です。

6日間創造説に穴の開くような聖書解釈を容認すると、自然が恩寵を食い滅ぼしてしまいます。ゆえに私はエリクソンの神学を認めません。

□165 意外だ！

自由キリスト者 - 2004/05/12 16:48 -

ほほ〜う！

カルヴァンがそんなことを書いておりましたか！！

私の中でカルヴァンのイメージが変わりそうです。

また、一つ勉強になりました。感謝！

□164 ノンクリスチャンは無能か？

[山谷](#) - 2004/05/12 13:42 -

再建主義者、曰く、

>ノンクリスチャンはすべて手持ちのカードを出し尽くした。彼らからはこれ以上何も期待できない。我々の出番だ。

このような極端な考え方は、一般恩恵を全否定するという、再建主義に「のみ」固有な神学的誤謬から出て来るものでありましょう。

ここで、カルヴァンの言葉を思い出して見ましょう。『キリスト教綱要』第2編2:15-16において、カルヴァンは、次のように述べています。

われわれは、異教徒の著作家において、このこと（理性の光）に出くわすごとに、かれらのうちに輝いているおどろくほどの真理の光によって、次のことに注意をうながされる。すなわち人間の精神は、たといどんなにその完全さから墮落し、よこしまになっているとしても、しかもなお、神の特別な賜物をまとい、これによって整えられているのである。もし、われわれが神の御霊こそ真理の唯一の源泉だ、ということを考えているな

らば、神の御霊を侮辱したい人でないかぎり、真理そのものの現われるところ、どこにおいても、これをしりぞけたり・軽んじたりしてはならない。なぜなら、御霊の賜物は、これをあなどり・はずかしめることなしには、けなすことができないからである。

われわれはこれら（古代の異教徒に与えられた理性の光）が、神の御霊のもっとも卓越した恵みの賜物であることを忘れてはならない。神は、人類の公共の福祉のために、かれの欲したもう人々にこれをわかち与えたもうのである。

以上を読む限り、再建主義者とは、ノンクリスチャンによる様々な業績が「人類の公共の福祉のために、神の御霊が与えられた最も卓越した恵みの賜物」であることを、完全に忘却してしまった人々にほかならないことが、わかるでしょう。

そうして、再建主義者がノンクリスチャンの様々な業績を否定し、けなすときには、裁かれるのはノンクリスチャンではなく、「神の御霊を侮辱し、御霊の賜物をあなどり・はずかしめる」再建主義者の方でありましょう。

さもなくば、再建主義者は公然と「非カルヴァン主義者」「反カルヴァン主義者」であることを自認するほかないでしょう。

## □ 162 政治と文化について（2）

[山谷](#) - 2004/05/10 12:49 -

主権国家の国家システムである司法・立法・行政は、いずれもキリストの頭首権に由来するものですから、キリスト者である裁判官・国会議員・官僚は、自分の良心に背くことなく、それらの職務を遂行することが出来ると思われまふ。

ただし、国家権力の本質である天使的勢力が悪鬼化する場合がありますから、その時には、キリスト者である裁判官・国会議員・官僚は、キリスト者としての自己の良心に従って、抵抗権を行使することになります。この抵抗権の行使は、具体的には、職務命令を下す上司や上長に対しての非暴力不服従というかたちをとることになるでしょう。その結果として懲戒または免職という事態になったとしても、喜んで「自分の十字架を取る」ことになります。

また、現代の国家システムにおける司法・立法・行政は、潜在的に悪鬼的性格を持っている国家権力（天使的勢力）を監視し、抑止するという機能を持つように、歴史的に形成されて来たものですから、キリスト者である裁判官・国会議員・官僚が、自己の良心に従って職務を遂行するならば、それがそのまま、国家権力の悪鬼化を防止する機能になるはずなのです。

そのような「悪鬼化を防止する機能」としてのキリスト者の政治への積極的参加が必要だ、というのが、カール・バルトが社会民主党員となった神学的理由でありましょう。また、ヨーロッパのキリスト教政党の存在理由も、同じようにして、神学的に根拠づけることが出来ます。

ここで重要なのは、現代の諸国家が、キリスト者の良心をよく反映させた、明文化された政治契約としての憲法を持つこと。その憲法が国家の最高法規としてきちんと機能するように、キリスト者である裁判官・国会議員・官僚が、自己の良心に従って職務を遂行し、また、必要な場合には、キリスト者としての抵抗権を行使すること。また、「自然と恩恵」が調和した存在である「教会」が、常に「小さき者たち」※の視点に立って、国家権力を監視し、預言者的な声を挙げて行くことが必要でありましょう。とりわけ現在、非明文の政治契約を考慮する



のではなく、あくまで、明文化された政治契約にのみ厳密に照らして「憲法判断」を行う司法の機能が、重要視されていると思います。

※「小さき者たち」とは、「神の国（自然と恩恵が完全に調和した再臨後の世界）は、このような者たちのものである」と主イエスが言われた、小さく、無力な人たちのことを意味しています。

## □161 政治と文化について（1）

[山谷](#) - 2004/05/10 12:48 -

キリストの頭首権は現経緯において、三つの種類に委譲されていると考えられます。

- 第一。「キリストの御体」としての信仰共同体（教会）
- 第二。「国家の絶対主権」としての領域主権（主権国家）
- 第三。「社会の分散主権」としての領域主権（文化あるいは15の法領域）

上記中、「自然と恩恵」が調和しているのは「キリストの御体」としての教会だけです。なぜなら、自然と恩恵の完全な調和である「受肉者キリスト」に結合された信仰者は、キリストに似た者とされているからです。ただし、信仰共同体はまだ完成されてはおらず、完全にキリストに似た者とされるには再臨を待たなければなりません。それゆえ、「自然と恩恵」の調和にすでに参与し始めているが、いまだ完成には至っていない（すでに-しかし-いまだ）という、「中間時の時制」に規定されているのです。ここから、「中間倫理」の必要性が生まれて来ます。いまだ完成には至っていないゆえに、キリスト者と言えども墮落して罪を犯す場合があります。それゆえ、中間時においてキリスト者は国家権力に服さなければならないのです。（カルヴァン派の場合は、墮落は起きえないと考えますので、有効召命を受けていなかった、という説明の仕方を探ります）

第二の「国家の絶対主権」としての領域主権は、主権国家であり、国家権力の具体的な行使にあたる国家システム（司法・立法・行政）です。そこで問題となるのは、「自然と恩恵」の調和に参与しているキリスト者が、国家システムの中に積極的に参加して、司法・立法・行政の職に就き、仕事をすべきかどうか、ということです。

この問題を考えるために、第三の「社会の分散主権」としての文化を考えると、助けになるとおもわれます。

ベルコフによれば、新約聖書神学においては「ストイケイア」と呼ばれる宇宙の構成に関わる諸霊が、文化を担っていると考えられています。これはカイパーの言う領域主権、あるいは15の法領域と重ね合わせて考えることが出来るでしょう。

文化のひとつに、「野球」があります。

再建主義者によれば、人間の文化はすべて聖書に基づいて「決疑論的」に形成しなければならないということです。すると当然のことながら、政治のみならず、学問、芸術、そして、野球も、「決疑論的」に形成しなければならないことになります。

もし、野球のルールを聖書に基づいて決疑論的に形成しないとしたら、それは「ヒューマニズムの産物」となり、「悪魔的」だということになってしまいます。なぜなら、再建主義は一般恩恵を認めないからです。

しかし、従来のキリスト教神学は、一般恩恵を採用するわけですから、なにも、聖書に対して決疑論的に根拠させなくても、野球のルールはそれだけで、きちんと立派な正当性を持つこと



になるのです。

つまり、キリストの頭首権が、ストイケイアを介して、15の法領域に分岐され、「社会の分散主権」として、野球のルールの中にも流れ込んでいる、と見る事が出来るからです。それゆえ、野球のルールも、審判の判定も、共にキリストの頭首権に由来すると見る事が出来、それゆえに、キリスト者である野球選手は、自分の良心に背くことなく、野球のルールと審判の判定に従って、ゲームをすることが出来るのです。

おそらく、政治についても、野球とまったく同じ考え方をすることが出来るのではないかと思います。

#### ■ 160 クリスチャンの政治観

ただのおじさん - 2004/05/08 06:29 -

クリスチャンは政治に関してどう考えるべきなのでしょう。

再建主義の主張を見聞きして、改めて考えさせられました。

教会が政治に直接関与することはどうかとも思いますが、クリスチャン個人が政治に関与することまで否定されるべきでしょうか？

ヨーロッパではキリスト教政党が存在します。

私の属している教会は、政教分離を強くうたっていますが、ヨーロッパ型のキリスト教主義政党の存在を認める人が何人もいます。米国の今の政治のありようを見て、真のキリスト教主義政党の存在が必要であるとさえ言う人もいます。

政治をすること自体が悪であるという主張は聖書にはありません。でも日本ではまだまだ政治をすること自体が悪であるという意識が強いように思われます。たとえ日本の政治家が悪い人たちが多いからと言って、政治をすること自体が悪いわけではないと思います。

クリスチャンは政治をすることによっても証が立てられるはずだからです。私は、神を畏れる者にこそ政治をして欲しいと思います。これが聖書の政治観だと思うからです。

#### ■ 159 聖書解釈について

[山谷](#) - 2004/05/07 09:55 -

プロテスタントは宗教改革を行ったときに、「真理の命題集」として聖書を扱い、それに基づいて教義を構築しようとしました。「聖書解釈に基づいて信仰共同体を形成する」という道を選択したわけです。

ところが、プロテスタントの中では聖書解釈をめぐる意見が分かれ、その結果、「信仰共同体が分裂する」という結果になりました。事実上、聖書解釈の数だけ共同体が存在する、と言ってもよいでしょう。

これに対してカトリックは、「信仰共同体において聖書を解釈する」という道を選択しました。これですと、共同体の生活の座が聖書解釈に反映され、統一見解が保たれるわけですが、しかし、「聖書解釈の多様性」というダイナミズムが損なわれてしまう恐れがあります。

おそらくは、プロテスタントの「聖書解釈に基づいて信仰共同体を形成する」という道と、カトリックの「信仰共同体において聖書を解釈する」という道のあいだに、「ヴィア・メディア」（中道）とでも言うべき行き方があるのではないかと考えています。

その理想が、「信仰共同体において聖書を解釈しつつ、聖書解釈に基づいて信仰共同体を刷新する」という循環を永続的にやっていく在り方でしょう。

このような在り方は、改革長老教会だけの専売特許ではなく、第二ヴァチカン公会議において

も見られた精神であると思います。

「信仰共同体において聖書を解釈する」ということの中には、エキュメニズム公会議が定めた「世界信条」や、各教派が定めた「歴史的諸信条」に沿いつつ、しかも、信仰共同体の霊的権威（主教、司教、監督、大会、中会、バプテストや単立教会の牧師）のカバーリングに服しつつ聖書を解釈する、ということが含まれています。

これに対し、「聖書解釈に基づいて信仰共同体を刷新する」ということの中には、御言葉の光に照らして、信仰共同体の礼拝と生活と奉仕を吟味して、改めるべきものを改めて行くという「教会刷新」が含まれています。

さて、ここから先が分岐点となります。教会刷新を確信するあまり、信仰共同体のカバーリングを軽視するのか。それとも、あくまで信仰共同体のカバーリングに服しながら、教会を刷新する道を模索するのか。

再建主義者が改革長老教会のカバーリングに服しながら、教会刷新を模索するつもりがあるのなら、おそらくそれは可能であると思います。その場合には、「堕胎者や同性愛者の公開処刑」というような政治的アジェンダは、確実に取り下げなければならなくなります。そうして、「法律による中絶の禁止」や「憲法における同性間結婚の禁止」といった、現在のアメリカ大統領選挙の争点となっている、より現実的な政治的アジェンダへと移行することになるでしょう。

スコットランド長老教会（フリーチャーチ）は、カバーリング機関としてすでに警告声明を出しているのですから、それに服するかどうかは、再建主義者の側に今問われていることです。今後は、カバーリングのもとにとどまろうとする「現実的再建主義」と、カバーリングから出てしまう「原理主義的再建主義」に分かれて行くことになるであろうと思います。

□157 定義や意味が一致しない時にどうするか？

ただのおじさん - 2004/05/06 22:36 -

山谷さんは回顧の中で、

>意味のすり替え

を再建主義者が行っていると言っておられます。

こういう議論では、定義をきちんとしないと話にならないことは、議論の仕方を知っている山谷さんならばお分かりの筈です。意味のすり替えは、定義が不一致になるということです。意味をすり替えているということは、違う定義で議論をしているということです。定義が不一致では幾ら議論をしても埒があかないのは当然のことでしょう。

聖書をベースに議論をするのは、相手が前提主義者ならば当然のことですが、前提主義にもまた前提があるということに私は気がつきました。聖書解釈の仕方、聖書の読み方の一致です。私自身、相手が聖書主義に立っているにもかかわらず、前提主義的思考をしているにもかかわらず、定義や意味が一致せず、意見のやりとりが噛み合わなかった体験があります。そしてなぜかと考えた時に、先に述べた、聖書解釈の仕方、聖書の読み方の不一致が原因であることに気がついたのです。そしてその理由をさらに考えていくと、聖書の理解、解釈が、単純には1つにはなりきれないほどに聖書の教えが深いからであるというところに行き着きました。それはプロテスタントと言っても様々な教派があるという事実からも明らかではないかと推測します。人間が聖書を理解し、解釈する以上、聖書解釈の仕方、聖書の読み方の不一致はある程度まで逃れられないものなのでしょう。それでも聖書解釈の仕方、聖書の読み方が違うクリスチャンと話をするのであれば、俗的には、相手に対して敬意を払うこと、聖書的には、相手に対して愛をもって接することです。私自身、意見が違う相手といろいろな話をしてきました。

でも人と話をする時に一番大切であり、建設的な話し合いができるのは、相手に対して愛をもって接する時なのです。愛なき議論は証にもならないし、人を躓かせます。

さらに言うと、聖書ですらこうなのですから、たとえば、カイパーやシェイファーやヴァンティル、ドーウィウェルトなどに至ってはもっと解釈の仕方、読み方の不一致が生まれます。それは先に述べた、聖書解釈の仕方、聖書の読み方が不一致であるので、それぞれが文章を読む視点が異なり、それがまた定義や意味のズレを生むのです。これの解決もまた先と同じように、相手に対して愛をもって接する以外にないのです。お互いが定義の不一致を理解して、そのズレを修正しようとする時に、建設的な話し合いは成立します。

私自身は直接再建主義者に疑問をぶついたりすることはしないと思います。なぜならば、先に述べた、建設的な話し合いが成立する条件が、彼らと話し合う時に整わないと判断しているからです。再建主義は相手に敬意を払う考え方ではないのです。相手に敬意を払わない相手と話をする意志は私にはありません。

#### 156 日ユ同祖論

ストリーム - 2004/05/06 18:18 -

富井氏が「日ユ同祖論者」になることを主体的に選択せざるを得ないのかその理由がよくわかりました。なぜなのか？と不思議に思っていました。が、神学とか教理とかよく分からない私のような者も、筋道立ててわかりやすく説明してくださって、疑問が解けました。過酷な再建主義の論理に直面して、日本的なるものを救うためであったのですね。

#### 155 日ユ同祖論

[山谷](#) - 2004/05/06 16:48 -

「非二契約論パーシャルプレテリズム再建主義」の亀井氏や「フルプレテリズム再建主義」の谷口氏らに対して、「二契約論パーシャルプレテリズム再建主義」の富井氏が現在独自の論陣を張っているわけですが、富井氏の特徴としては、「日ユ同祖論」が見られます。

しかもそれは、「大文字の日ユ同祖論」とも言うべき強い内容を持つもので、原始福音（原始幕屋）のそれと類似した、民族主義的なカラーが見られます。

概略して、次のような説を富井氏は御自分のサイトで展開しておられます。

1. ユダヤ人キリスト者共同体（エルサレム教会）が紀元70年の聖都陥落後に日本に移住し、それ以前にすでに日本各地に出来ていたユダヤ人入植地に福音伝道を行った。
2. 天照大神は「ヤハウエ」であり、豊受神は「イエス・キリスト」である。
3. 日本の神社は「ユダヤ教／原始キリスト教の礼拝所」であり、その構造は、モーセの幕屋やエルサレムの神殿を反映していて、鳥居はケルビムを意味する。
4. 日の丸は「イエス・キリスト」の栄光を表している。
5. 日本人は失われた「イスラエルの十部族の末裔」である。
6. 日本列島は、神の御名が置かれた「聖地」であり、日本人は、聖地守護職に任じられた「ケルビム」である。
7. 失われた十部族である日本人が、ユダヤ人と再結合することによって、「神聖な民族」が現代に回復される。
8. 再建主義が実現した世界においては、日本人が「神聖な民族」として、レビ系大祭司の家系である天皇のもとに、全人類を指導する地位に就く。

上記のような「日ユ同祖論」の考え方は、アメリカの再建主義にはまったく見られないものです。富井氏の再建主義は、正確には「日本的再建主義」とでも言うべきものでありましょう。



これらの主張の根拠として、富井氏はご自分の個人的な体験や調査研究のほかに、学習研究社が出している『ムー』という雑誌のライターである飛鳥昭雄氏や三神たける氏の著書を、主要文献としているようです。

「恩恵vs自然」を直接対決させた場合、非キリスト教の政治制度や文化や宗教や伝統や歴史は、すべて、「ヒューマニズムの産物」となり、「悪魔的」な事物ということになってしまいます。

つまり、日本の政治・文化・宗教・伝統・歴史は、「悪魔的」だということになってしまいます。

このような不愉快な論理的帰結を回避するためには、日本の政治・文化・宗教・伝統・歴史は、すべて「ユダヤ・キリスト教起源」であると前提するほか、ありません。

つまり、日本を愛する富井氏が、過酷な再建主義の論理に直面して、日本的なるものを救うためには、富井氏は「日ユ同祖論者」になることを、主体的に選択するしかないわけです。

しかし、中間時の中間領域の中性化された天使的勢力を前提とする新約聖書の世界観的パラダイムに立つならば、本来的に「自然vs恩恵」の直接対峙は回避されるわけですから、「歴史と文化を救うために日ユ同祖論を採る」というような救済措置を取る必要は、そもそもないことになります。

#### □ 154 恩恵論

[山谷](#) - 2004/05/06 10:32 -

アウグスティヌスとペラギウスの論争によって、西方では「恩恵vs自然」の構図が、神学の前面に出て来ることになりました。

これと対照的に、アウグスティヌスとペラギウスの論争から距離があった東方教会では、「自然vs恩恵」の構図が、あんまり、というか、ほとんど見られず、それゆえに、聖化論においては、「神が人となられたのは、人が神となるため」という「神化」（テオーシス）が説かれます。西方が、聖化を意志だけに関連させて考える傾向があるのに対して、東方では身体の神化も考えるようです。西方の伝統に立っているわたしなどからすれば、「恩恵論争」の不毛な戦いから本来的に解放されている東方の神学は、ある意味、うらやましいですね（笑） 故フランス・シェーファールの息子のフランキー・シェーファールが、お父様の路線を進んだ末に、東方教会に改宗してしまったことには、なんとなく理解できる気がします。

二千年の神学の歴史を通して、「恩恵vs自然」の対立の揺れは、繰り返し繰り返し起きており、中世ではゴットシャルクの二重予定説をめぐる論争、近世ではヤンセニストとイエズス会の論争、近代ではアルミニウス主義をめぐる論争、現代ではバルトとブルナーの論争がありました。

いずれの場合でも、「一般恩恵」を重視する立場の神学者は、その論理的帰結として、政治神学と経済神学の形成に寄与しています。たとえば、国際法と経済学のルイス・デ・モリナ、国際法と政治学のグロティウスは、いずれも二重予定説を否定して、一般恩恵と自然法を重視した神学者たちです。

現代では、「自然vs恩恵」の論争を止揚するために、カトリックの現代神学者であるカール・ラーナーが、キリスト論的解決を提示し、「ケノーシス・キリスト論（受肉論）的な超自然的実存規定」を言うことによって、恩恵によって立つ自然の構図を描こうとしています。



ラーナーの解決法を採らないとしたら、あとはたぶん、ウェスレアン・アルミニアンの「終末論的・聖化論的解決」を採るか、あるいは、カルヴァンのように、二重予定説と一般恩恵という相矛盾した概念を、矛盾をそのままにしておいてバランスを保つという「アーチ構造の神学」を採るかしかないでしょう。

いずれにせよ、一般恩恵と自然法の完全抹殺を目論む再建主義は、論外だと思います。

■153 私の教会の牧師に聞いてみましたが

ただのおじさん - 2004/05/03 08:43 -

再建主義については、私の教会の牧師にも聞いてみましたが、やはり山谷さんの言うように「恩恵論」の問題であろうということでした。

■152 領域主権論

ただのおじさん - 2004/05/01 10:52 -

あらためて領域主権論とは何かを自分なりに考えてみたのですが、山谷さんの回顧と結局同じになってしまいました。山谷さんが仰られておられるように、「中間時の中間領域における天使的勢力」が領域主権論には前提されていると思います。ですから、「中間時の中間領域における天使的勢力」を認めないことは、領域主権論を認めないことになるのではないのでしょうか。そしてそれは、シェーファーの「自然対恩寵の図式」にピタリとはまるということになるというなり、恩寵が自然を食い尽くし、理性から逃走してしまうという結論になるのは当然となります。

■151 改憲論議

[山谷](#) - 2004/04/30 16:55 -

ミレニアムサイトでは、改憲反対の論調が展開されているようですね。

その議論での鍵概念となっているのが「一と多」です。

「一と多」の調和という哲学問題については、ヘーゲルが、まず三位一体の中に解決を求めたのですが、三位一体は「信仰を前提として要求する」ゆえに、これを実用に適さないとして退け、次の段階として、国家の中に解決を求めました。これが、ヘーゲルの歴史哲学・国家哲学のスタート地点です。

「一と多」を調和させる、ヘーゲルにとっての理想的国家像とは、統治しない象徴的存在としての国家元首のもとに、各職能団体の利益代表による議会が、議会制民主主義を行う（コーポラティズム）という図式でした。

これは、非常に面白いことに、象徴天皇制の下における、各産業の利益代表（族議員）による国会運営という、戦後の日本の図式と、そっくりです。ことによったら、戦後日本の在り方というのは、「ヘーゲルの理想をほぼ完全に近いかたちで実現した」ものだったのかもしれませんが。それが、戦後日本の奇跡的な復興と経済成長の原因だったとしたら・・・

ところで、富井氏は憲法改正に明確に反対しておられるようですが、「一と多」を調和させる「三位一体論的憲法」というものを、再建主義の立場から、どのように描くのか。今後の富井氏の論調に注目したいと思います。

前千年期再臨論の立場からすれば、憲法の機能とは、潜在的に悪鬼的性格を持っている天使的勢力（国家権力）に対して「かせ」として、ブレーキをかけることです。ですから、「ブレー

キがよく効く憲法が、よい憲法だ」ということになります。

しかし、憲法9条が、現時点において、ブレーキとしてはまったく機能していないのは、明白です。これは、明文化された政治契約である日本国憲法とは別に、もうひとつの、非明文の政治契約である憲法が、存在していることからくる問題なのです。

戦後、占領軍は、日本の非武装を憲法に盛り込みましたが、朝鮮戦争勃発による東アジアの安全保障政策の大変更から、日本に憲法を改正させて、軍備を持たせようと、方針転換をしました。

これに対して、日本人のプライドをかけて「ノー！」を突きつけたのが、吉田首相です。しかし、現実には、アメリカ政府の指導により日本の再軍備が、警察予備隊、保安隊、自衛隊というかたちで、再開されることになりました。

これにより、軍備を厳禁する「明文化された政治契約としての日本国憲法」と、軍備の再開を命じた「非明文の政治契約としての極東安全保障政策」という、日本の「二憲法体制」が生まれてしまったのです。

つまり、戦後の日本とは、二つの憲法を囲む楕円である、ということが出来るでしょう。

この楕円軌道を、どういうかたちで正円にするか。あるいは、非明文の政治契約である「隠れた憲法」を、明文化された政治契約である憲法に、どのように適合的に書き込むか。これが、現在の改憲問題の焦眉であろうと思われます。

#### □150 タイトルの訂正

自由キリスト者 - 2004/04/28 19:11 -

以下のタイトル「再建主義は、アメリカに出るべくして出た思想家」というのは、「再建主義は、アメリカに出るべくして出た、思想家」の誤りでした。訂正します。

#### □149 再建主義は、アメリカに出るべくして出た思想家 自由キリスト者 - 2004/04/28 19:09 -

「ただのおじさん」氏と、山谷先生の対話、興味深く読ませていただきました。再建主義者のT氏が言われるように、ほんとうに300年前のプロテスタントは、再建主義者と同じ主張だったのでしょうか？私は、浅学にしてわかりませんが・・・。

私は、雰囲気からしか物が言えませんが、再建主義はアメリカに出るべくして出た、アメリカ的な思想だと思います。

彼らの独特な積極性は、アメリカ流のものではないでしょうか？

その淵源には、ユニテリアンのエマソンや、クリスチャンサイエンスといった、マサチューセッツ州のもうひとつの源泉があるように感じます。また、プラグマティズムの影響もあるかもしれません。

もちろん、そっくりそのままのコピーではありませんが、思考方法といった「公式」はかなりコピーされているように感じます。

やはり、再建主義は、現代アメリカに生まれるべくして生まれた、アメリカの思想なのだと思います。

います。

「もうだめだとあきらめたら、悪魔はその隙から恐怖の霊を注ぎ込む」などといった考えは、  
○○サイエンス教会のポジティブシンキングそのものです。悪魔という考えは、キリスト教的だとしても・・・。

#### ■148 再建主義者と非再建主義者の相違点

[山谷](#) - 2004/04/28 14:28 -

>カパーやシェイファーやヴァンティルの主張だけでは再建主義にはなり得ない、他の要素が彼らを再建主義者にしているのだ。その要素はなんだろう。知りたい。私と再建主義者の途方もない違いの理由を。

再建主義者と非再建主義者との決定的相違点は、おそらく「恩恵論」の部分ではないかと感じています。

従来のキリスト教神学では、「聖霊の照明としての一般恩恵に支えられた自然人の理性能力」を肯定してきたわけです。カルヴァンも『キリスト教綱要』で、異教徒の理性能力は聖霊の賜物であると言明しています。

しかし、再建主義者は、一般恩恵を否定し、その論理的帰結として、異教徒の真理認識能力を否定することになるのです。これは、「聖霊に満たされた信者の理性能力は、異教徒のそれより活性化される」と言ったヴァンティルの考え方を、究極まで押し進めたものです。

従来のキリスト教神学のように、異教徒の理性能力は聖霊の照明によると考えるなら、当然のことながら、「自然法」はある程度の神的起源を持つことになります。ですから、信仰告白において「神の指によって記された自然法と律法」と並び称されるわけです。カルヴァンも「神の法である自然法をより明瞭に書いたのが律法である」と言っています。

しかし、もし再建主義者が言うように、一般恩恵は存在せず、自然法は単なる「墮落した人間の偶然の考案物」に過ぎないのなら、「神の支配」は地上の諸国家を通しては「全然行われていない」ことになります。（唯一の例外がジュネーヴとマサチューセッツ湾植民地であるわけです）

これが、再建主義者が言うところの「真空状態の中間領域」です。地上では「キリストの御体なる教会」を別にすれば、「神の支配」はまったく行われておらず、真空状態なのです。

「一般恩恵は存在しない」というようなことを、再建主義者以外の神学者が考えたり言ったりしたか？ということとは、まだ勉強不足で明言できません。しかし、カール・バルトは、エミール・ブルンナーとの「恩恵論争」の中で、「一般恩恵は存在しない」という立場にかなり近い主張を展開していたのではないかと思います。

それでもバルトの場合、「真空状態の中間領域」を言うまでに至らなかったのは、告白教会の反ナチス闘争の中で、「中間時の中間領域を占める天使的勢力としての国家権力」という新約聖書神学の概念に根拠して、ナチスと戦っていたからです。つまりバルトにとっては、「中間領域は真空ではなかった」のです。これはバルトの『義認と法』という論文によく出ています。

ここからバルトは、「悪鬼的な国家権力を監視するために、教会が政治活動に積極的に関与する必要性」を説き、戦後、自ら社会民主党の黨員となりました。同じようにして、オランダの改革派教会の神学者ヘンドリクス・ベルコフは、「悪鬼的な国家権力を監視するための、教会



の世界的な連帯」を目指して、世界教会協議会（WCC）に指導的な役割を果たしました。

ところが、再建主義者の場合は、「一般恩恵」を否定し、「中間時の中間領域の天使的勢力である国家権力」も否定するわけですから、当然のことながら、「神の支配を地上に実現するために、司法律法を現代社会に厳格に適用せよ」という主張に論理的に導かれて行ってしまうのです。

このような考え方は、「墮落した人間が、地上において安寧で秩序ある生活を営むことが出来るように、神が一般恩恵と自然法を授けられた」というカルヴァンの考え方に根本的に反するものですから、再建主義はどう考えても「非カルヴァン主義」と言うほかないでしょう。これが、スコットランド長老教会大会決議が再建主義を排斥した最大の神学的理由であろうと思います。

■147 私と再建主義者の違いは何なのだ？ ただのおじさん - 2004/04/28 00:20 -

私はカイパーもシェイファーもヴァンティルもよいところがあると思い、彼らの主張をかなり取り入れた立場を取っている。本もそれぞれ何冊も読んでいて、おおよその主張は分かっているつもりだ。そして、前提主義も、自然対恩寵の対立図式も、2つの学問論や、領域主権論も私の信仰の立場には組み込まれている。それでも私は根本主義で、プレミレで、ディスペンセーション主義の立場だ。カイパーやシェイファーやヴァンティルの主張を支持しただけでは人は再建主義者にはならない。再建主義に私が関心を持つ理由は、私が影響を受けた弁証学者や神学者の影響を再建主義者たちも受けているからだ。でも私は再建主義を支持しない。カイパーやシェイファーやヴァンティルの主張だけでは再建主義にはなり得ない、他の要素が彼らを再建主義者にしているのだ。その要素はなんだろう。知りたい。私と再建主義者の途方もない違いの理由を。

山谷さんの大論争の回顧を読むほどに、何で私と再建主義者の主張がこんなに違うのかかえって分からなくなった。これは山谷さんに聞いてみたいことです。

■146 バプテスト連盟 平和宣言 [山谷](#) - 2004/04/27 13:09 -

ログNo.140「前論か後論か（2）」で触れた、バプテスト連盟の平和宣言について、まだご存じない方もあると思いますので、参考にリンクを貼って置きます。

[バプテスト連盟 「平和に関する信仰的宣言」 2002年11月15日 日本バプテスト連盟第49回定期総会採択](#)

■143 再建主義者の末路は哀れ 自由キリスト者 - 2004/04/27 00:16 -

世間では時に「行者の末路は哀れ」などと言われますが、再建主義者の末路も、多くの場合、そうなのではないかと思います。

Ｔ氏は、非常に純粋な方ですが、それだけに実に惜しいと思いますね。徹底的な聖書信仰は結構ですが、まず神に全幅の信頼を寄せ、標準的な教会と調和的關係が保たれているのであれば、キリスト教という大海を泳ぎきることは難しいと思います。世と教会に真っ向から逆らうのは、いつの世も賢明な生き方ではありませんね。誰も、一人だけの力では生きられないのですから。



**■142 教会を敵に回しても・・・**

自由キリスト者 - 2004/04/26 23:27 -

山谷先生のご意見が、大多数のプロテスタントの標準的な考えであろうと思います。  
T氏の再建主義も、基本的な部分はそうなのでしょうけど、やはり過激ですね。  
ほとんどの教会を敵に回しても、決してよいことにはならないと思います。  
再建主義の戦いと、ルターのカトリック教会との戦いとは本質的に違うと思います。  
T氏は、どうして、そこまでして教会と戦うのでしょうか？

世界中の教会からつまはじきにされたのでは、もはや生きる道はありませんよね。T氏が単なる思想家というなら別ですが・・・。牧師なんですから、彼は・・・。

**■141 前論か後論か（3）**[山谷](#) - 2004/04/26 23:02 -

キリスト者の抵抗権とは、「憲法」と「非暴力不服従」のほかに、国境を越えた世界的なキリスト者の、良心に基づく連帯による、「世界憲章」と「世界的監視」と「世界的保障」というものも、存在すると思います。

世界に広がるキリストの教会には、世界の諸国家が、キリスト者の良心に沿って正しく国家権力を行使するように、監視を行い、「預言者的な声」を挙げていくという責務があります。それらは、人権の擁護や、核兵器の廃絶、貧困の撲滅、富の適正な分配、奴隷制の廃止、人種差別の解消、紛争の調停などに関わるものです。

「世界的監視」としては、世界教会協議会（WCC）がありますし、「世界憲章」としては、国連憲章などがありますし、「世界的保障」としては、国連安全保障理事会などがあります。

安保理の議場に、巨大なキリストの再臨の絵が掲げられているのは、非常に象徴的です。世界の諸国家は、等しく、キリストに由来する頭首権に基づいて、国家権力を行使し、しかも、その国家権力の行使は、「キリスト者の良心に沿って」（世界憲章や諸憲章や人道的理念に沿って）行わなければならない。そうして、行使した責任はすべて、キリストの再臨の日に、問われることになるのです。

神学とは、「世界内の現象に対して意味を与える概念基礎工事」のようなものだと思います。そう考えますと、政治について全く背反しているように見える石原都知事・筑紫哲也氏・バプテスト連盟。この三者の主張をひとしく基礎付けることが出来て、しかも、上手く統合させることが出来る、前千年王国論の政治神学こそが、神学としての「説明機能」を最も良く果たせるものなのではないかと思います。

**■140 前論か後論か（2）**[山谷](#) - 2004/04/26 22:55 -

後千年王国論と前千年王国論との最大の相違は、やはりなんと言っても「政治神学」の部分でありましょう。

前千年王国論に立つ場合は、キリストが再臨するまでは、「キリストの頭首権に由来し、天使的勢力に仲介された国家権力」というものが、地上に存在し続けます。そうして、わたしたちは、その国家権力に服従する主体としての「国民」であるわけです。

なぜ赤信号で渡ってはいけないのか。なぜ納税義務を果たさなければならないのか。なぜ国歌を斉唱し国旗に一礼しなければならないのか。これらはすべて、「キリストの頭首権」に由来する国家権力が命じることですから、「なぜ従うのか？」と問われるならば、「キリストに由来する権威がそう命じているから、従うのだ」ということになります。石原都知事が「国家が最終権威である」と記者質問に答えていますが、これは、国家権力はキリストの頭首権に由来

すると考える政治神学によって基礎付けることが可能です。また、バプテスト連盟は最近、「キリスト以外のいかなるものにも服従しない」との信仰告白を採択しました。これも、国家権力の適正な命令に従うことは、キリストの頭首権に従うことにほかならないと考える政治神学によって基礎付けることが可能です。

しかし、ややこしい点は、「キリストの頭首権に由来する権力を委任された天使的勢力が、その悪鬼的性格を顕現させる場合がある」ということです。これが「中間時の中間領域の中性化された天使的勢力の揺れ」です。「ぶれ」と言ってもいいでしょうか。

天使的勢力は、キリスト高挙の出来事によって打破され、中性化されて、キリストに仕えるしもべとなり、キリストから委任された、キリストの頭首権に由来する国家権力を行使しているわけです。しかし、この「揺れ」が起きた場合、天使的勢力は、委任された権力を乱用して、反キリストの悪鬼的性格を露呈させることがあります。

ジャーナリストの筑紫哲也氏は「国家性悪説」ということを言いますが、これは、国家権力は悪鬼的性格を潜在させていると考える政治神学によって基礎付けることが可能です。

カルヴァンは、国家と国民が政治契約を結び、その契約は明文化されたものでなければならないと考えました。この「国民」が、キリスト者である国民である場合には、当然のことながら、「キリスト者の良心」と「キリスト者の良心に基づく抵抗権」が、政治契約に反映されることになります。こうして、国家権力は、明文化された政治契約（憲法）によって活動を制約され、制限されることになります。「立憲政治」ですね。

カルヴァンの考え方に立てば、国家権力を制限する最高法規である「憲法」とは、「キリスト者の良心を反映した明文化された政治契約であり、＜キリストによって中性化されている国家権力が、その潜在的な悪鬼的性格を顕現させることがないように予防する＞ために、国家権力を制限・制約する機能である」ということになります。

そうなりますと、キリスト者にとっての理想とは、キリスト者の良心をよく反映し、明文化された憲法が、憲法としての機能を十全に果たしている国家。これが「理想の国家」ということになります。世界各国の憲法を比較してみて、どの憲法が、キリスト者の良心を最もよく反映させた憲法か、研究してみるのも面白いでしょう。

前千年王国論の場合は、国家の本質は天使的勢力だと考えますので、国家が悪鬼化した場合であっても、キリスト者は特定の個人を敵視したり憎悪したりする必要はないのです。なぜなら、国王、独裁者、首相、大統領、皇帝、議会、行政府、官僚、裁判官、軍人らは、国家権力の本質では「ない」し、国家権力を操作している人たちでも「ない」からです。国家権力を動かしているのは超人間的な天使的勢力なのですから。それゆえ、キリスト者は政府を敵視せず、政治家や官僚を敵視せず、かえって「神に仕える人々」として敬意を払い、感謝し、愛し、そのために祈りもするのですが、しかもなお、悪鬼的性格を露呈させる国家権力に対しては、キリスト者の良心に基づく抵抗を、断固として貫き通すことが出来るのです。

どこかの国で、近づいてくる戦車に向かって、小さな花を持った若者が立ちふさがり、砲塔から顔を出した兵士に向かって、「愛しているよ！」と叫びながら、花を差し出すという場面を、かつてテレビで見たことがありました。究極的には、キリスト者の抵抗とは、そのようなものではないでしょうか？ これは、キング牧師の説く「非暴力不服従」と同じものだと思います。

Ｔ氏の悪霊追い出しも凄いが、それにしても、何と彼はオカルティックなのだろう！！

■138 前論か後論か（１）

[山谷](#) - 2004/04/26 22:33 -

ミレニアム・サイトでは、生々しい悪霊追い出しについての体験談が語られているようです。前千年期説に立つならば、キリストが再臨して天使的勢力を一掃するまでは、地上に「国家権力・律法主義・異教の諸霊・悪魔と悪霊」が存在し続けるわけですから、富井氏の言われるような「力の伝道」は、前千年期説のパラダイムの中に、実にしっかり収まるのです。

これに対して、後千年期説のフルプレテリズム派のパラダイムにおいては、「キリストが紀元70年に再臨し、最後の審判が完了し、新天新地が到来した。それが現在だ」と見るわけです。これであると「なぜ今も悪霊が働いているのか」という点が、まったく説明がつかなくなってしまうのです。

富井氏が、同じ再建主義であるのに、フルプレテリズム派を厳しく批判し断罪したのは、「フルプレテリズムのパラダイムでは、現実が上手く説明出来ない」ということを、ご自分の牧会カウンセラーとしての悪霊追い出しの体験でもって、強く認識しておられたからだだと思います。

■137 後千年王国論は悲観論者に陥りやすいかも

内なる人 - 2004/04/26 20:09 -

ストリームさん返信ありがとうございます。これは私の推測ですがポスト・ミレに立つと地上世界はだんだん良くなるに違いないって思うので、良くなるのが当たり前だから、逆に自分自身でも社会でもいいですが思いどおりにいかない時や試練にあうと落ち込みやすくなるのではないかなと思います。

逆にプレ・ミレはそもそもイエス様が再臨するまで千年王国はこないし、そもそもこの世は悪くて当然っていう前提に立つので、何か試練や不幸があっても、そんなのあたりまえじゃんっていうある種、楽観的になると思います。

例えば自分がある人に裏切られたり、いじめられたりするとしてその人が親友であるときと嫌いな人のどちらかだったら明らかに親友であるときの方がショックがでかくなることに似ているかもしれません。親友なのになんでって・・・

■136 私もそう感じています。

ストリーム - 2004/04/26 18:37 -

後千年王国論は本当に楽観的かな？「私だけ」ではないと思いますよ。私も以前から、そう感じていました。何か、悲観的になってくるのです。

■135 後千年王国論は本当に楽観的かな？

内なる人 - 2004/04/26 13:03 -

理論上は確かに楽観的なのですが、富井先生と山谷先生の議論を見ていると山谷先生のほうが余裕というか落ち着いているとおもうのは私だけでしょうか？

■134 はじめまして

ただのおじさん - 2004/04/24 16:22 -

山谷さんとは某掲示板でやりとりをしたことがあります、この様な掲示板があるとは知り



ませんでした。とりあえずご挨拶申し上げます。私の終末に対するモットーは、

「たとえあす終末が来ようとも、きょう私はりんごの木を植える」

という立場です。

その立場から再建主義は極端すぎる考え方に思えます。

■133 この掲示板は、何と勉強になることであろう！ 自由キリスト者 - 2004/04/19 21:54 -  
ありがとうございます。

へえー！日ユ同祖論というのは、結構な伝統があるんですね。

戦前からホーリネスで唱えられていたのですか。

私は、いままで、日ユ同祖論は、雑誌「ムー」や「トワイライトゾーン」などの愛読者が好んで語る、オカルト趣味の範疇のものだと思っておりましたが、正統の福音派でも研究されていたんですね。

では、T氏も、この点については、そんなに的外れなことをやっているわけではないということですね。（？）少なくとも、異端的な研究ではないと・・・。

■132 日ユ同祖論 [山谷](#) - 2004/04/19 13:15 -

ミレニウム・サイトでの「日ユ同祖論」は、キリスト教再建主義そのものとは本来的に関係がなく、あくまで、再建主義とは別のところでの、富井氏による個人的研究であろうと理解しています。

日本の福音派では、戦前は、ホーリネス教団の中田重治監督が「日ユ同祖論」を主張しました。キリスト再臨の際には、日本人は「回復されたイスラエル」として救いに入れられるから、現時点においてもはや日本人に伝道する必要はない。むしろ、日本人がイスラエルとしてのアイデンティティーに目覚めるように、また、再臨が早く起きるように、祈りなさい、と説きました。これに異議を唱えた東京聖書学院の五人の教授が（五教授派）が、中田監督とたもとをわかち、ホーリネス派は分裂することになってしまいました。

中田監督は、北海道伝道でアイヌの人々に接し、その民族学的起源を研究する中で、失われたイスラエルの十部族が日本に到来していた可能性を、強く確信するようになったようです。

太平洋戦争後は、日本基督教団に統合されていたホーリネス系の教派が、それぞれ独立教団として再スタートしましたが、その中で、中田監督派の流れを汲む諸教団は、今も日ユ同祖論的な考え方や、イスラエルのために祈ることの重視などを、「伝統」として保持しているようです。

わたしとしては、日ユ同祖論については、「傍証的」なものはたくさんあると思いますが、決定的な「確証的」なものは、いまだ出ていないと思っています。もっとも、ヘブル語碑文が国内で発掘されるとか、日本人のDNA解析の結果、ユダヤ人との共通項が確認されたとかいうことがあれば、話は別ですが。

しかし、なんといっても、「なぜ日本人は割礼をしないのか」ということを明快に説明できないところが、難点であろうと思っています。

■131 ゲネア問題完結編 [山谷](#) - 2004/04/19 13:02 -



再建主義が立つか倒れるかを決する重要な「ゲネア」の釈義をめぐって、論争が続いて来ましたが、「ゲネア問題完結編」をアップしました。これで決着することを希望しています。  
[http://www.salvos.com/makotoyamaya/genea\\_argument.html](http://www.salvos.com/makotoyamaya/genea_argument.html)

なお、最近、新改訳聖書を読んでいたところ、問題となる「ゲネア」の箇所はいずれも、欄外注にて「別訳『民族』」と説明されていることがわかりました。

#### 新改訳聖書

マタイ24:34「時代」 欄外注 別訳「民族」  
 マルコ13:30「時代」 欄外注 別訳「民族」  
 ルカ21:32「時代」 欄外注 あるいは「民族」

念のため、New International Versionも調べてみましたところ、やはり欄外注にて、別訳race（民族あるいは人種）と説明していました。

つまり、福音派が使用している代表的な公用聖書である新改訳聖書もNew International Versionも、「ゲネア」が「民族」と釈義し得ることの可能性を、積極的に排除しておらず、むしろ、消極的に確認している、と言うことができるでしょう。

ところで、これと反対の立場なのが、Today's English Version（あるいは、Good News Bible）と、フランシスコ会聖書研究所訳聖書です。前者は、「今現在生きている人たちが死なないうちに、これらのことがすべて起きる」というように、意識しています。また、フランシスコ会訳の方では、脚注において「当時のある人々の生存中に、すなわち約40年後に、エルサレムが滅亡することを指す」と説明しています。

つまり、グッドニュースバイブルとフランシスコ会訳新約聖書を採用するならば、パーシャルプレテリズム再建主義の方に軍配が上がることになります。

しかし、フランシスコ会訳は、脚注において「ベールは権威のしるしであり、女性が教会において語ることを許可する」という説明がなされていますし、また、「主権の霊・位の霊・支配の霊・権威の霊は、政府や公共機関を支配している超自然的存在である」という説明をしていますから、全面的にフランシスコ会訳を採用してしまうと、再建主義の主張が、くつがえされてしまうことになります。

あちらが立てば、こちらが立たず、という感じでしょうか。

#### ☐ 129 T氏のユダヤ観

自由キリスト者 - 2004/04/16 18:55 -

T氏は、ユダヤ人と日本人をことのほか結び付けたいと考えておられるようですが、福音派ではどうなのでしょう？

#### ☐ 128 再建主義の人達は

内なる人 - 2004/04/15 22:09 -

あまりにも自分達の聖書の解釈を絶対視してるかなーと思いました。確信を持つことはいいことだけど。

[「再建主義大論争を回顧する」へ](#)